



## 【ご法話】

(寄稿) 本願寺派布教使 小林顯英 師

本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき  
功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし

ここにこそ、あなたの本当の安心の場があり、生まれ難い人として生まれ、値い難い法の内に、すでにお育て賜っていたと気付かせて頂くとき、生まれさせていただけただけのよろこび、遇えてよかったというよろこびがひらかれて来ます。

あなたの人生、決して空しいままに終わらせはしない。もしも、あなたを闇の世界へ死なせるようなことがあるならば、私は阿弥陀とは名告らない。と誓い、すでに南無阿弥陀仏と到り届いて下さっている如来さまであります。

一つでも条件をつけられたならば、もれて行くのは誰もいない、この私であることを見抜いて下さっている如来さまでありますから、「そのままのあなたを引き受けた」と、はたらいてくださっております。

「南無阿弥陀仏」の仰せにおまかせする時、佛になる術を何一つ持たない私が、煩惱を抱えたままの私が、阿弥陀の世界に生まれさせて頂くことが出来るのです。

何一つ障りとなることもなく、この身、このまんまの私が「佛」とならせて頂き、ご縁の方々を、「すくうことの出来る身」にさせて頂くのであります。

先般、群馬県上野村の御巢鷹山へ登らせていただくご縁がありました。

三十年前\*、機体の一部が破損し、操縦不能となり、迷走の末、日航ジャンボ機が墜落した現場です。

一昨年(2013年)\* 群馬県藤岡市の西蓮寺様の報恩講に、初めてご縁を頂き伺わせて頂きました。

ご住職が、  
「今はもう有りませんが、ここに、かつては体育館が有り、御巢鷹山より運ばれた御遺体の、身元確認を最初に行ったのが、ここなんです」  
と話して下さいました。

私はその時迄、御巢鷹山がどこに在るのかさえ知りませんでした。どこか遠い所の話のように思っていました。急に身近になり、是非連れて行って欲しい。事故現場へ行ってみたいとお願いをしました。

歩く。ということが大の苦手な私です。家族に言うと、全く相手にされることなく、「無理！」のひと言で片づけられてしまいました。

御巢鷹山の尾根に登りたい。思いはどんどん強くなり、一年半掛かって平地なら十キロを何とか歩行できるようになり、五月に西蓮寺様の御法座に寄せて頂き、ご住職が私の思いに付き合っ下さり、共に事故現場へ行って下さいました。

予想以上に道は整備されており、現場の約一キロ位手前迄は車でいけますが、その一キロ足らずが大変厳しかったです。

ご本尊、布袍、輪袈裟をお持ち下さったご住職の調声で、『讚仏偈』をお勤めさせて頂いた後、520名の方のお名前が刻まれた石碑、御遺体の発見場所にお名前の記された墓標、銘版、石碑……、圧倒されながら三十年前に思いを馳せるのでした。

かねて、「老少不定」とは聞かせて頂いておりますし、「生死一如」、「諸行は無常である。怠りなく励めよ」とは教えられて来てはおりますが……で、あります。

520名の方が、  
「これが今生最後のフライトである」  
とあって搭乗されたのでありましょか。そんなことは……。

他人事ではありません。私は今・ここが自分の臨終の場だと、考えたことがあるのでしょうか。

それと同時に、親鸞聖人が  
「まづ善信が身には臨終の善悪をば申さず、信心決定の心とは、疑なければ正定聚に住することにて候ふなり。」  
と『御消息』に示された一節を思い出していました。

臨終の善悪をば申さず。つまり、死に様を問う必要がない。阿弥陀如来の仰せ、「そのままのあなたを引き受けた」とはたらい下さる「南無阿弥陀仏」にお任せをする、その時に「佛になることが正しく定まった仲間に入らせていただいている」従って、どこで、どのような縁によって人生の幕がおろされても、何の関わりも無いと教えて下さっているのです。

にも関わらず、ややもすれば私たちは、“死に様”によって、その人の人生や、そのいのちの行く末迄も、勝手に決めつけてしまっているのではないのでしょうか。

突然の別れ。しかも残された人には受け入れ難い事情……そんな私の、つらさ、苦しさ、悲しさを知って下さっていますから、「あなた独りに、そのつらさ、苦しさ、悲しさを背負わせはしない。ここに阿弥陀が居る」と、告げて下さっているのです。

ひとしづく ひとしづくづつ 血の涙 なかにほとけも すすり泣きます  
— 詠み人知らず

決してあなたを独りにほしめない。あなたを見捨てるようなことがあるならば、阿弥陀とは名告らないと、告げて下さっています。

この“はたらき”の内にありますから、死に様を全く気にする必要はなく、何時、何処で果てようと、大悲の内であったと安心して“今・此処”を精一杯生きることが出来るのです。

雨ダレが落ちて、石やアスファルトに当たり、ハネが上がる。当然の事ですが雨ダレの落ちるのが先です。雨ダレが落ちるより先にハネが上がることはありませんし、ハネが上がるのは、石やアスファルトの力ではなく、落ちて来た雨ダレの力、はたらきによってハネが上がるのです。

同じように、この口に「南無阿弥陀佛」とお念佛が出て下さっているのは、この私のところへ、間違いなく到り届いて下さっている「南無阿弥陀佛」の名号がましますと、聞かせて頂くのです。

梯和上が、

「私は、随分耳が遠うなってしまいましたが、自分の声ぐらいはよう聞こえますんじや。この口に、ナンマンダブと出てくださいっている声は、よう聞こえていますんや」

と、嬉しそうにお話くださってことを思い出します。

どこを探す必要もありません。この口に「ナンマンダブツ」と聞こえてくださるお念佛さまこそ、「私の方が忘れておっても、忘れてくださらん如来さまのおはたらき」なのであります。

この人生を共に生きて下さっている如来さまでありました。私が忘れておっても、忘れて下さらん如来さまでありますから、しかもこのままの私を引き受けたと仰って下さっているのでありますから、安心しておまかせ出来るのであります。

「そのまままかせよ、必ずすくう、親だからね」

と、すでに到り届いて下さった阿弥陀さまにお任せする時、すでに“いのち”の帰り行く処が明らかになります。

安心して帰れる処があつてこそ、「人生は旅」と言うことが出来るのです。帰る処を持たないのは“旅”ではなく“放浪”であります。

何故、帰る処を問題にしなければならないのか。実は旅の楽しさを支えているものは、何時でも安心して帰るとことの出来る家(処)があるということなのです。

私が佛にならさせて頂くのに必要なすべては、すでに「南無阿弥陀佛」と仕上がり、すでに私を抱き取って下さってありましたと気付かせて頂くとき、勿体ないことであります。有難うございました。と、頭のあげようのない私を教えていただくことであります。

生まれさせて頂けたよろこび、遇わせて頂けたよろこび、大切にしたいものです。

---

\* 寄稿くださったのは2015年の夏でありました。

このご法話は、本願寺派布教使 小林顯英師 が聞見会新聞のためにご好意で寄稿くださいました。

今回こうして寄稿して下さったご法話をこの紙面上に掲載できたことは、慈海にとって大きな喜びであります。といいますが、この聞見会新聞の発刊を決めたのは、数年前小林先生から戴いた「なんか書いたる」とのお言葉がきっかけでありました。当時慈海は、ネット上でのライブ放送のみで活動していましたので、本当にご法話を書いてくださるなら掲載する場を作らなければいけないと、この新聞の発刊を決めたことであります。小林先生といえば、当時布教使の養成に心血を注がれ大変ご多忙な中であつたと伺っております。まさかそんなお忙しい中で寄稿くださるとは想像だにしておりませんでした。数ヶ月後、小林先生手書きの原稿が慈海の手元に届きました。封を開けたとき、手書きの原稿が目に入り、思わずお念仏を叫んだことでございます。原稿が届いてから実に数年が経ってしまいました。この原稿に掲載するならばそれなりの会のカタチにしなければと焦りつつも、ズルズルと思えばかりが先行して、思うようにならないまま年月を重ねてしまいました。今回、このご法話を多くの方に読んでいただくためには、会のカタチができるのをこれ以上待つことができないと判断し、意を決して紙面に掲載することといたしました。掲載まで随分と年月を費やしてしまったこと、大変、大変申し訳無い気持ちでおります。

最後に、改めて小林先生には、この場をお借りしまして、深くお礼を申し上げます。ありがとうございました。 (慈海)

## 【編集後記】

福井県と石川県の県境にある本願寺吉崎別院には、本堂とは別に蓮如上人のお御堂があります。「中宗堂(ちゅうそどう)」と呼ばれるこのお御堂には、蓮如上人が吉崎を離れられる際に形見としてご自身のお姿を写されたと伝えられる「オカタミの御真影」様が安置されております。この中宗堂では、毎朝の晨朝勤行(じんじょうごんぎょう:朝のお勤めのこと)の際、蓮如上人が我らにおのこしくださったお手紙「帖内御文章」八十通を繰り返し読みで拝読しています。蓮如上人お形見のお姿の前で、お形見としてのこされたご法話(御文章)をお聴聞し、お形見のお念仏をこの口からこの耳に戴いて、吉崎の朝が始まります。

夏のこの時期、朝のお御堂に虫の死骸がいくつか転がっていることがよくあります。朝の掃除の際にきれいにしても、それでもなぜかお勤めのときには新しい死骸が、それもお勤めのときに座る場所に、転がっていることがあります。虫さえも、せめてこの命の最後に仏法を聞きたいということでしょうか。そんなことを思うと、この虫たちがとても愛おしく思えて、少し位置をずらして座り、伴に蓮如上人のご教化を戴くことであります。

“たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて

阿彌陀佛をふかくたのみまゐらせて念仏申すべきものなり。” (白骨の御文章より)

さて、毎回ではありますが、聞見会新聞の発行が遅れに遅れ、楽しみにしてくださっている方には大変申し訳なく思っております。この度、やっとのことで第7号を発行することができました。今後は体裁や編集などの労力を削減することで、もっとこまめに発行できるようにと考え、紙面のデザインをよりシンプルにし、掲載内容を絞ることにしました。その分、より短い期間に定期的にお届けできるように頑張ろうと考えております。どうぞこれからも楽しみにしてくださいと嬉しいです。

聞見会代表 釋慈海  
合掌 なんまんだぶ

---

### ◇ 聞見会について ◇

聞見会は浄土真宗本願寺派僧侶釋慈海が主催するお念仏の会です。  
聞見会へのお問い合わせは下記までご連絡ください。

<住 所> 〒919-0476 福井県坂井市春江町針原20-31 釋慈海宛  
<メールアドレス> [info@monken.org](mailto:info@monken.org)  
<電話> 090-3295-8969 (慈海個人携帯)

### ◇ 聞見会および聞見会新聞へのご支援 ◇

聞見会および聞見会新聞の発行は有志の方々によるご支援によって運営・配布されています。  
ご支援は下記口座へのお振込で受け付けております。どうかご支援よろしくお願いたします。

<銀行振込>	店名:三三八(さんさんはち)	<ゆうちょ送金>	記号:13310
	店番:338		店番:5415221
	口座:(普通)0541522		名前:モンケンカイ

---

聞見会新聞 第7号(平成29年8月1日発行) <発行>聞見会 <発行人>釋慈海 <編集>釋慈海